博士（文　学）　九　里　順　子

学位論文題名

明治詩史論

—透谷・羽衣・敏を視座として—

学位論文内容の要旨

［形式］本論文は、序、Ⅰ（1～2）、Ⅱ（1～3）、Ⅲ（1～3）、結によって構成され、400字詰め原稿用紙に換算すると約754枚に相当する。なお、注は各章の末尾に付されている。

［内容］本論文は、明治期に近代詩が切り開いた詩的表現の広がりを、北村透谷、武島羽衣、上田敏の三詩人を結節点として考察したものである。特にこの三詩人の詩作品に関して、和歌や歌謡など先行文芸との表現上の関連性を緻密に分析し、詩的表現としての超越性の獲得をめざす詩的営為の一系譜を浮かび上がらせた点にその特徴がある。また同時代の他の詩人や批評家による詩論と比較対照することで、近代詩史の中では傍流とされることの多い武島羽衣や上田敏の位置を、その詩論の面からも明らかにし、独自の位置を照射した点でも新たな試みといえるものである。

このうち、まず「序」では、本論文で中心的に扱われる三詩人の文学的な活動が概観された後、主要なテーマと問題が提示される。

それに続く「Ⅰ」は、透谷の『楚囚之詩』と『蓬莱曲』を、その恋愛観や自由民権運動からの離脱の問題と関連させつつ考察したものである。中でも、『楚囚之詩』では、理想化された故郷が自由民権運動からの離脱によって失われた共同体の代理物として示さる一方で、『蓬莱曲』では蓬莱山の山頂から更にわけ入った理想郷に変換され、そこに透谷の観念的な恋愛観が凝縮されている点に本論文は注目している。また、こうした理想的な世界の提示に、詩的表現の超越性の萌芽をみるが、しかしそれは、透谷にとって重要な葛藤が回避される場であるとする。つまり、政治的な共同性をめぐる葛藤や、恋愛観念と具体的な恋愛対象との分裂、更には肉体と観念の相克など、本論文が「身体性」という独特の用語で提示する対話的な葛藤の契機が、詩的な超越性の形成によってつみ取られたと論じている。

次の「Ⅱ」は、雅語を多用したために、擬古派と蔑称されることも多かった詩人・武島羽衣の詩作と詩論に関する分析である。ここでは特に詩集『花紅葉』の詩的表現の緻密な分析を行うとともに、羽衣を批判した外山正一や中村秋香の批評、高山樗牛や島村抱月の詩論、高田早苗の修辞学などを羽衣自身の詩論と比較対照し、羽衣の詩的超越性の性格を明らかにしている。そして、羽衣の詩的超越性が、和歌的措辞を最大限に利用しつつも、それを越えようとする地点を志向しており、そこに既存の雅語の体系性に依存しながら、西洋的な芸術概念や修辞学的方法を導入し、両者が結合した地点に芸術の超越性をみようとする羽衣の姿勢を読みとっている。特に、これを詩語のレベルで論証すべく、羽衣が手本とした類題和歌集の用例と『花紅葉』の表現を対照した部分は、本論文中の白眉ともいうべき精密な分析が披瀝された部分といえる。

「Ⅲ」では、上田敏の訳詩集『海潮音』や創作詩、そして詩論の分析を行っている。とりわけここでは、『海潮音』を近世歌謡の表現との対比において分析し、また同時代の創作歌謡に関する敏の批評なども視野に入れて、詩的な「声調」と「節奏」を重視する敏の姿勢を浮き彫りにしている。また創作詩「汽車に乗りて」を相馬御風、蒲原有明の詩作と比較検討する一方で、メーテルリンクの象徴主義に影響を受けた敏の詩論の性格を、川路柳虹や服部嘉香など、自然主義系の詩論との距離において測定している。その結果、明瞭になるのは、「声調」や「節奏」を重視しつつも、過剰な修辞的工夫や詩的リズムの余分な巧緻化を避け、あくまで即物的で「簡撲の詩形」を心がける敏の詩作観である。そしてそれは、歌謡の表現を援用するなどして、詩的表現に「身体性」を持ち込みながら、過剰な美的表現に流れることなく、簡潔な象徴性に詩的超越性のあり方を求めた上田敏の独自の位置を示しているといえる。

最後の「結」では、「Ⅰ」から「Ⅲ」で論じた内容をまとめ、本論文で明らかにした詩的超越性の性格を更に鮮明に論じている。これにより、透谷にあっては超越性の主題と詩的表現とが乖離したままであったものが、西洋的な詩概念と雅語を総合する羽衣によって、その総合化への道が開かれる経緯が明らかにされる。そして、更に上田敏において、主題と表現の一致がみられ、明治の近代詩における詩的超越性が一つの完結をみることを究明している。また大正期における室生犀星や萩原朔太郎などがこの系譜の上で問題化できる点を指摘して、今後の課題を提示している。それは、自然主義的な文学観によって隠されてしまった系譜であり、以後、この文学観が日本の近代文学を隠微に支配したために、見えにくくなってしまった細い水脈を、改めて発掘したものといえる。

学位論文審査の要旨

主　査　　教　授　　中　山　昭　彦
副　査　　教　授　　長　尾　輝　彦
副　査　　助教授　　水　溜　真由美

学位論文題名

明治詩史論

—透谷・羽衣・敏を視座として—

本委員会は、上記の論文を審査するに際して、基礎的な手続きの面と内容面とに分け、本論文が新しい研究の方向を拓くものと評価できるか否かを検討した。基礎的な手続きとして検討したのは、明治期の近代詩を、北村透谷、武島羽衣、上田敏の三詩人を中心に分析する上での、必要とされる文献資料の適否、当該分野の研究史の把握の度合いと参考文献の理解度、引用文献の正確さ等の点である。また内容面としては、全体の構成と論理の展開力、各章ごとのテーマとその展開、方法の有効性、学術研究としての達成度などについてである。以下、それらの検討の結果と本委員会の評価を、要点をしぼって説明していくことにしたい。

まず基礎的な手続きに関してであるが、本論文は、上に挙げた三詩人の詩作や詩論と、近世歌謡、和歌、同時代の他の詩人や批評家による詩作と詩論などとの諸関係を論じたものであるため、本論文がこの点に関して十分な量の文献を収集し、適切な理解を示しているかが検討された。その結果、本委員会では、特に同時代の詩論に関しては、やや偏った傾向のものに限定されている憾みはあるものの、その他の点では妥当な質と量の資料が提示されており、各文献の位置づけと解釈も、ほぼ妥当なものであるとの判断に達した。

また、本論文は、明治期の詩において、詩的な超越性がいかにして形成されたかを解明する目的をもっており、その解明に際しての、作品の選定基準やそれぞれの作品の研究動向の把握の度合いが問題となる。本委員会では、これらの点に関して、作品の選定基準と各作品に関する研究動向の把握はほぼ公正なものであり、また、先行研究の記述が簡略化

されすぎているという欠点はあるものの、ほぼ妥当な理解に達しているものと判断した。

更に、参考文献の理解度と引用文献の正確さについてであるが、前者に関しては、近代詩や短歌、俳句を幅広い文化的な視座にたって研究した文献の理解度という点に問題があるとはいえ、その他の点では十分な理解が示されているといえる。また後者に関しては、用字などにやや不正確な点がみられはするが、その度合いは許容範囲内にとどまるものであると考える。

次に内容面についてであるが、まず学術的な達成度という点からみれば、本論文の重要な成果の一つは、和歌や近世歌謡を援用しながらも、西洋からもたらされた新体詩の諸概念とこれを結びつけ、独自の詩的超越性の次元を形成した近代詩人の細い水脈を明らかにした点である。中でも武島羽衣と上田敏は、従来、自然主義的な詩観に押され、単なる擬古派や象徴詩人として軽く扱われれることが多かったが、この両詩人の独自の位置を究明した点に、本論文の重要な意義があるといえる。

またこれに加えて、詩的表現に、観念や情念などが対話的に葛藤する場としての「身体性」を求める営為が、透谷を初発とし、羽衣を経由して敏において一応の完成をみる経緯を示した点が、本論文の第二の成果といえるものである。とりわけ、和歌や歌謡の表現との緻密で周到な対比を試み、そうした堅実な論証を経た上で、こうした「身体性」の消長を明らかにした点が、その特徴といえよう。

もっとも本論文は、個々の詩人や詩作に密着するあまり、三詩人の営為を結ぶこのような道筋が、やや不明瞭なものになった面がないではない。詩的表現としての超越性が、しばしば「普遍的」なものだとされるが、どの点において普遍性が保証されているのかが明確でなく、「エロス」や「身体性」といった多用される用語の定義にもやや曖昧な点が残されている。自然主義に関する言及を、詩に関する批評に限定したため、自然主義文学全体に対する視野の中で、この文学運動によって半ば抹殺された羽衣と敏の位置が捉え切れていないという問題もある。

しかし、上に挙げた二つの点において、近代詩研究に独自の成果をもたらした点は評価しうるものであり、個々の詩人に関する論文としては、完結性の高いものであるといえる。

本委員会は、提出された申請論文を慎重に審査し、また口述試験を実施して十分に審議を重ねた結果、以上に述べたような本論文の評価に鑑み、全員一致して九里順子氏に博士（文学）の学位を授与することが妥当であるとの結論に達した。